

The Book of Tea における英語の特徴

——岡倉天心の詩的作意——

東 郷 登志子

はじめに

岡倉天心 (1862-1913) の英文著作 *The Book of Tea* 『茶の本』 (1906年) は「茶」に象徴される東洋の哲学と伝統文化に基く芸術論であるが、アメリカで出版されて以来13ヶ国語以上に翻訳され今日に至っている。そこで本論では *The Book of Tea* が出版当初より英米のメディアで絶賛されてきた理由の一つとして文体的特徴を挙げ、天心の生前に出版された三冊の英文著中 *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan* 『東洋の理想』 (1903) や *The Awakening of Japan* 『日本の覚醒』 (1904) とは趣を異にするものとして、以下の観点から詩的意匠を凝らし、独特の脚色が施された価値ある文学作品であることを確認することを目的とする。

池上 (1991)¹ は Roman Jakobson² の説を引用し、「英詩のことば」には読者の注意を惹きつけるための機能、すなわち詩的機能 (poetic function) があり、その機能が働くためには形式に違和感を持たせるなどの特別な手段が講じられなければならないと述べている。このような過程を異化 (defamiliarization) とか前景化 (foregrounding) と呼び、詩人は、この前景化を行うために数ある言葉の中から意味や音の響きやそれが喚起するイメージなどを考慮し、文脈に最も適する語を選択 (selection) するのだという。そしてこれらを組み合わせ、選択の軸と結合の軸とが最もうまく交錯した時、それまで平凡であった言葉に新たな意味が生まれ、生き生きとした表現の世界が作り出されてくるとされる。

詩人が「ことばの再創造者」と呼ばれるゆえんはこのためであるが、*The Book of Tea* における天心の英語の特徴から見てきたものは、明らかにそうした「ことばの再創造者」たる詩人としての鋭敏な意識と正確な言葉の選択であった。それはシェイクスピア William Shakespeare (1564-1616) やミルトン John Milton (1608-74) の影響を感じさせながらも、英詩と漢詩という異なる二文化圏に跨る詩的律動を感じ取った天才的な詩人が達成した東西文化の融合であり、英語という西洋言語によって東洋の気韻生動を描いた珠玉の絵画的散文詩でもあったと言える。本論はそのように考えるに至った根拠を *The Book of Tea* における語彙及び表現から抽出し、考察したものである。

I. 天心の「造語」

詩人は、日常の世界を超えた世界をはじめ、独自の認識や感情領域などを表現しようとするため、

日常の言語表現の枠を破ることがあり、その際従来の言語の資源に満足できず必要な新造語 (neologism) を創り出すことがあるとされている。³ この説を実証するかのように *The Book of Tea* の本文中にはいくつかの造語が散見される (原典は1906年のフォックス・ダフィールド社による初版本に依拠し、参照箇所は、全ての版に共通する章と段落の数字によって示す。例：1-4 は第一章の第四節)。⁴

1-4 a tempest in a tea-cup (<storm in a tea-cup)

「茶碗の中の嵐、空騒ぎ」。OEDによると、**a storm in a tea-cup**という表現を1854年W. B. Bernardが題字に用いたのがこの種の表現の初出である。また1854年Andrews Latin Dictionaryのキケロの詩の説明にto raise **a tempest in a teapot**という表現が記載されている。1891年にはCent. Dictionaryで**A tempest in a tea-pot**が登場しその説明としてa great disturbance over a small matterと記されている。さらに1896年Peterson Mag. Jan. にはWhat a ridiculous **tea-pot tempest!** という表現がある。

だがここで注意すべきことはOEDに掲載されているtea-potと天心が表現したtea-cupとの違いである。キケロの詩の説明にある「ポットの中の嵐」は茶葉のジャンピング現象を言及したものと考えられ、暖めたポットに茶葉を入れその上から沸騰した湯を注ぐと茶葉が対流、移動を始めるが、この茶葉が踊る状態を指して言ったものであろう。それに対して**a storm in a tea-cup**は茶碗の中に直接茶葉を入れて湯を注がない限り起こり得ない現象なので、a tempest in a tea-potとは異なる表現でまさに「つまらないことでもめること」をパロディ化して「茶碗の中の嵐」と言い換えたのであろう。天心は『茶の本』の中でtea-cupと頭韻を踏むため、storm「嵐」の同義語tempestを用い、**tempest in a tea-cup**という合成語を作ったと考えられる。第一章The Cup of Humanity「人間性の器」というタイトルの主旨からもtempest in a tea-potではなく、tea-cupでなければならなかったであろう。

天心は、What a tempest in a tea-cup! という文の直前に“much ado about nothing”という語句を用い、ここでシェイクスピアの劇*Much Ado About Nothing*『空騒ぎ』を読者に意識させ、tempestという語への手掛かりを与える。

因みにtempestはシェイクスピアの*The Tempest*『あらし』という和解劇の題名から引用されたものと考えられ、tempest in a teacupというパロディ的な言い方は現在も新聞、雑誌等のジャーナリズムで使われている。⁵ だが天心がシェイクスピアの和解劇から意識してこの語を用いた背景には、単なるパロディや思いつきと決め付けられない深い意味合いが込められていると考えられる。その理由は、作中プロスペロの台詞の中に、この作品を最後に長かった創作活動を終え、死を迎えようとするシェイクスピアの気持ちが滲み出ているからである。特に第四幕で語られる次の部分に注目したい。

We are such stuff

As dreams are made on; and our little life

Is rounded with a sleep. (*The Tempest*, IV.i. 155-7)

人生を夢のようなものだと言え、眠りに始まり眠りに終わるという「円環」を想わせる台詞に、天心がこだわり続けていた「円相」⁶ とが重なる。天心が*The Book of Tea*を境に、文学作品を手がけるようになったこととtempestという語の引用とは無縁ではないだろう。

- 3-1 **Zennism**「禅道（仏教）」。Zenという語はあるが、Zennism という語はOEDにはない。Taoismと対句的に用いるために天心が新たに造った語と考えられる。仏教がBuddhism、道教がTaoismであるから、行為としての禅でなく、教理としての禅をZennismとしたのであろう。宗教的なことを論じる際の天心のこうした造語の巧みは、万神殿（Pantheon）をもじって万魔殿（Pandaemonium）⁷ という語を造語した清教徒詩人ミルトンの詩魂を髣髴とさせるものがある。

- 6-12 **swordsoul**「剣の魂」。sword の複合語としてはsword-bearer, sword-blade, sword-grass, sword-playなどがあるが、swordsoulという語はない。従ってこれも天心の造語と考えられる。swordとsoulの/s/の音の頭韻が天心らしい工夫の表れである。

- 7-8 **tea-gown**「(20世紀初頭頃の女性用の) 茶会服、準礼服」。

OEDによれば、この語義はnames for special fashions of garments worn by girls and women at teaとあり、女性が着る茶会用の服装を意味するのみで初出の年号はないが、『茶の本』最終章で利休が着ていた衣装の叙述がこの表現の初出である可能性は高い。

II. 天心独自の「意味の添加」

池上(1991)の分類に従えば、造語とは別のカテゴリーに「意味の添加」があり、その定義は「既成の語を活かして新しい意味を加え」たもので「古い本来の意味を復活」させているものを指す。詩人が日常言語の枠を超え、独自の認識と表現領域を拡大したという意味では造語に近い創造的な作為であるが、teaismはそれに相当する。

- 1-1 **teaism**「茶道」。OEDによるとaddiction to tea「お茶に目のないこと」と定義され1904年初出の例がある。⁸ 現在でもアメリカでは喫茶店などの名に使われているが、*The Book of Tea* (1906)で用いられている精神的な意味での「茶道」という意味はなかった。従って天心は*The Book of Tea*の中で、teaismの本来の語義に精神的な「茶道」という新たな「意味の添加」を行ったと考えられる。

zennismと**teaism**の2語が天心の造語であると指摘する研究者もいるが、⁹ 前述の定義に従えばこの**teaism**は厳密な意味での造語ではない。天心は第2章末尾の文を次章への橋渡しとして用い、Teaism was Taoism in disguise. と、頭韻を揃えた見事な一文で締めくくっている。簡明で断定的ではあるが、/t/の頭韻と/izəm/の脚韻による軽快にして且つ力強い音の響きが効果的である。「禅」と「道教」と「茶」の三要素を哲学的観点から論ずるために-ismという語尾で統一し、teaismという語の従来の意味に、新たに「茶道」という意味を添加したと考えられる。

Ⅲ. 詩語、古語、文語の使用

語彙の豊富さ¹⁰ については*The Book of Tea*に限らず、他の著作や英文ノート、講演、書簡類についても言えることであるが、特にこの作品においてはひとときわその感が強い。言葉の詩的機能を発揮させるために、語彙を入念に選択し、文脈の他の要素との結合を工夫した点が伺われる。ここではその豊富な語彙のうち、とりわけ天心が意図的に用いたであろう詩語 (Poetic Diction) を中心とした古語、形式語、文語を抽出する。なおシェイクスピアも語彙の多さ¹¹ で定評があったことが想起される。

Ⅲ-A. Poetic Diction (詩語)

シェイクスピアやミルトンの作品に見られる詩特有の典雅な語彙や言い回しが随所に用いられ、用語の選択に苦心したであろう様子が伺われる。

3-8 betwixt (=between) Heaven and Earth (古、詩)

3-14 spake (古、詩) speakの過去形 5-2 wondrous (詩) 不思議な

5-6 thou (古、詩) 汝 5-14 bane (詩) 滅亡、死

6-7 alas (詩・戯言) ああ、悲しいかな 6-10 mid (詩) =among

6-11 thee (古、詩) 汝を(に) 6-11 art (古、詩) =are

Ⅲ-B. Archaic (古語)、formal (形式語)、literary (文語)

天心は日本語表記でも古い候文形式を用いたので、英語の古語や形式語、文語の使用は当時としては不自然ではなかったかもしれない。だが、特に詩特有の表現や古風な文語表現を意図的に用いていたという指摘はできる。そのため格調の高さを感じさせる反面、堅苦しさや読み難さも伴う。

Ⅲ-B-1. 古語: 1-5 Fain would~ (古) 1-7 Nay (古風)

1-12 physician (英古風) 3-8 betwixt (=between) (古、詩)

3-14 spake (古、詩) 4-17 many a time (堅、古) 5-2 hoary (古風)

5-2 wondrous (詩) 5-3 anon (古、戯言) 5-4 maiden (英古)

5-6 thou (古、詩) 5-7 the board (古風、戯言) 5-12 verily (古風)

5-14 bane (詩) 6-3 whereon (古又は堅) 6-4 fearful (古風)

6-4 passing(古) 6-4 fair (古) 6-5 faint (古) 6-5 vitriol (古)

6-9 therefor (古) 6-11 thee (古、詩) 6-11 art (古、詩)=are

6-17 therefrom (古) 6-21 humour (古風) 7-1 abide (古)

7-7 bid (古又は堅) 7-7 rare (古)

Ⅲ-B-2. 形式語: 1-2 inasmuch as~ 1-3 parlance 1-3 seriocomic

1-5 be wont to~ 1-5 await 1-6 deride 1-7 garment

1-7 dine off 1-8 compatriot 1-8 comprise 1-8 attainment

1-8 deplorable 1-8 impart 1-8 torch 1-8 sentiments

1-9 furtherance 1-9 disdain 1-9 awaken to~ 1-11 esteem

1-13 thereof 1-14 solace 1-16 relate 1-16 resplendent

- 1-16 dualism 1-17 evanescence 1-17 strive 2-10 befriend
 2-12 phenomenal 2-12 eulogise 2-14 eclectic 3-2 laudable
 3-3 observe 3-12 temper 3-13 mode 3-13 predominance
 3-15 precept 3-15 endeavour 3-15 rejoin 3-16 menial
 3-16 weighty 4-2 devoid of 4-3 drawing-room 4-4 edifice (戯言)
 4-4 conflagration 4-5 edification (戯言) 4-7 amid
 4-8 incumbent 4-8 inculcate 4-8 obeisance 4-11 ordain
 4-11 dwelling 4-11 render 4-12 in connection with~
 4-12 evanescence 4-12 resolve 4-12 fugitiveness 4-13 replete
 4-13 contemporaneous 4-15 purposely 4-15 depiction
 4-17 the Occident 4-17 reiteration 4-17 representation
 4-17 chase 4-18 vexation 4-18 afford 5-2 veritable
 5-2 beneath 5-2 come to pass 5-2 mighty 5-4 mode
 5-5 call forth 5-6 communion 5-6 impart 5-6 await
 5-6 render 5-7 comradeship 5-8 invoke 5-9 hallow 5-9 kindred
 5-9 transcend 5-9 akin to 5-9 ennoble 5-10 resolve
 5-10 repose 5-11 hitherto 5-12 whereas 5-14 trait
 5-14 approbation 5-14 moreover 6-1 coeval 6-1 thereby
 6-2 bereft 6-5 personage 6-6 morrow (the~) 6-6 remains
 6-8 receptacle 6-9 extant 6-11 defile 6-13 evolve 6-13 ennoble
 6-13 atone 6-13 consecrate 6-13 thus 6-14 cull 6-14 chance
 6-15 enthrone 6-15 profound 6-15 edification 6-15 voluminous
 6-15 consign 6-16 solicitude 6-16 vessel 6-16 illustrious
 6-16 attain 6-16 vie 6-16 ordain 6-17 save 6-17 execution
 6-17 conduce 6-19 contradistinction 6-19 depart 6-21 recount
 6-21 appointed 6-21 vestige 6-21 workmanship 7-1 obtain
 7-2 manifold 7-2 render 7-2 designate 7-3 conduct
- III-B-3. 文語: 1-7 babe (=infant) 1-16 firmament (=sky)
 2-6 zephyr (擬人化された) 西風 3-9 woe (悲哀)
 3-10 dwell (古、文) (住む) 3-15 sway (古、文) 支配、影響
 4-8 sough (風が木々の間を通りながらひゅうひゅう音をたてる)
 4-10 verdure (草木の新緑) 4-17 board (古風) (食卓) 5-3 hark (耳を傾ける)
 5-4 sing of (詩歌を作る) 5-4 steed (文、戯言) 駿馬
 5-4 tempest (大嵐、暴風雨) 5-4 swain (文、古風) 男性の恋人
 5-4 high (文) 空、天 5-6 repast (堅又は文) 食卓 6-4 asunder (文) 別々に

- 6-6 whither (古) どこへ 6-7 hapless (文) 不幸な、不運な
 6-12 bondage (文) 奴隷の境遇 6-16 strew (文) ～に散らばっている
 6-21 but (文) ほんの、ただ (=only) 7-6 potion (文) 飲み物、一服

IV. 高雅、格調の高さ—フランス語からの借用語使用

天心の大学時代の第二外国語はフランス語であった。そのためフランス語を語源とする借用語をさりげなく用い、高雅な雰囲気と格調の高さを出している。特にboudoirは、18～19世紀の貴族階級の女性のサロン生活をしのばせる語彙で、後続のthe abode of the humble「身分の卑しい者の住み家」と対照をなす表現として意図的に用いられている。天心は茶道が東洋の民主主義の精神を表わすものであることを示すため、茶があらゆる階級に浸透し「茶道の信奉者をすべて趣味において貴族にしてくれる」という誇張した表現をとっている。大胆で奇抜な対比表現は天心の文体的特徴の一つであるが、第一章の始めから読者の意表をつく表現を用いている。

もっともこれら全ての借用語が高雅さを生むために用いられたわけではない。例えば1-7 fricassée はbabeと共に用いることでイギリスの風刺作家スウィフトJonathan Swift (1667-1745) の*A Modest Proposal* (1729) を暗示する。赤子の肉をフリカッセにして食べればアイルランドの窮状をしのぐことができるというSwiftの皮肉を想起させ、イギリスのアイルランド抑圧政策¹²を背後に埋め込む天心の西洋批判の極め付けともいえる文脈で効果的に用いられている。反論にも説得力があり、さりげない風刺で高雅な雰囲気を感じさせるのも天心ならではのウィットがなせる技である。このあたりの呼吸もシェイクスピアの機知に通じるかもしれない。

- 1-3 cuisine「料理法、料理」 1-3 porcelain「磁器」
 1-3 boudoir「^{けいぼう}閨房、女性の居室」 1-3 salutation おじぎ (=greeting)
 1-4 reticence「言外の意味」 (=implication) 1-4 aroma「香氣」
 1-7 fricassée「フリカッセ」 1-8 compatriot「同胞、同国人」
 1-8 pathetic「悲壮な」 1-10 epigram「風刺詩」
 1-11 catechism「(キリスト教) 教理問答集」 1-12 alias「別名」
 1-13 regalia「王の特権」 1-13 heretics「異端者」
 1-14 (the tea)-equipage「茶の仕度」
 1-15 devotee「帰依者、信奉者」 <dévot(e)「信心家」=believer
 2-2 dynasty「王朝」 2-13 vestige「遺跡」 2-16 beatitude「至福」
 3-1 proverbial「周知の」 3-15 sacrilege「冒瀆、不敬行為」
 4-3 patronage「保護、後援」 4-3 artisan「職人」
 4-4 grandeur「偉大さ、高貴」 4-8 obeisance「服従、従順」
 4-10 lichen「地衣、苔」 4-14 bric-à-brac「古道具」
 4-17 fraud「不正」 5-2 ravine「くぼ地、峡谷」
 5-4 sire「無能な奴」 5-5 vibrate「ふるえる、響く」

- 上掲の場面以外にも、内観的思念や伝説を叙述する際には英詩の古典的、伝統的な韻律を用い、叙情的に詠い上げている件が認められる。

V-B. 対句の効果

対句は漢詩文でも用いられ反意語の組み合わせをとることが多く、軽快なリズムを感じさせる詩的表現となっている。

3-4 folds and unfolds

3-12 at birth - at death, dream - reality, brightness - obscurity

V-C. リズム調整上の言い換え

前後の語句との関係でリズムを整えるため、Japan を言い換えている。

6-5 the land of the Mikado「帝の国」→日本

V-D. 音楽用語の使用

5-1 harp 5-2 harpist, musicians, instrument, melody, strings, note, ill-
according with the songs they fain would sing

5-3 chords, play, voices 5-4 change the key, mode

5-5 symphony, touch, vibrate 5-15 rhapsodies 6-1 cadence

6-20 solo 6-20 concerto

V-E. 絵画用語と絵画的描写（イメージ）

5-5 canvas, chiaroscuro, light, shadow

眼前に繰り広げられる現実のようにリアルに、しかも絵画的な印象を与えながら語る天心の語り手（story-teller）としての資質が躍如たる写實的描写が見られる。絵巻物を見るような動的な動きと絵画的な色彩を感じさせ、読者を惹きつける迫真的な描写が特徴である。

第一章 大日輪黄帝と闇の魔神祝融とが争う中国伝説のシーン。天空を縦横無尽に駆けめぐる両者の、上下左右の大きな動きや鮮やかな色彩感覚がイメージを膨らませる。

第四章 茶室の露地の苔の青々としたみずみずしさなどの描写は、適確な語彙選択によって鮮やかな自然の臨場感を出している。Verdureなど、新緑の若々しさを表わす語彙がその一例である。

第五章 ①竜門の琴の伝説で自然と人間との精神的、靈的触れ合いを描くシーン。

押韻：swayed like an ardent swain；

On high, like a haughty maiden；clashing steel and trampling steeds；... tempest、
頭韻、脚韻による軽快なリズムと強弱強（Amphimacer）の詩脚と男性韻で力強いリズム感を感じさせる。bright and fairなど、強弱強の詩脚は古典詩学（quantity system）のものだが、聞き手を惹きつけ、物語が絵巻物的に、動的に描写されている。

②細川邸の侍が雪村の掛け物を自らの身体を切り裂いて入れ、火災の被害から護ったという戯作のシーン。写實的、迫真的描写が際立っている。

V-F. 音効果、音象徴

「ある音とそれを表記する文字が特定の事物の印象と結びついて、その事物のイメヂ（image）を喚起するような音とその印象との関連を音象徴（sound symbolism）と呼び、その現われを音

効果 (sound effect) と言う。¹⁵ また、音に伴う感情的要素を音質、特に音色、音感 (tone-colour) と言う。¹⁶ 書き言葉では 'bough'/'cough' のように視覚的な韻を踏む eye rhyme の効果も考慮しなければならないが、天心が音の響きや押韻効果を用いてイメージ作りをした意図は明らかである。

音象徴における効果は主に詩に多用され、音楽的なリズムや音調 (tone) に重点がおかれるものに有用性が高いとされているが、散文においてもその効果は無視できない。天心は散文を韻文化することにより、本来不可能であった音による目に見えないインプレッションの描写を試み、書き言葉では本来表現不可能な話し言葉のプロソディという話し手の感情の陰影を付加することに成功したと考えられる。音象徴も比喩と並んで一大テーマであるためここでは下記の例のみを挙げる。

第4章第2節茶室の構造を述べるあたりから /s/ 音の使用が頻繁に現れ、俗界と区別された「聖域」であるイメージや「静寂」を象徴している。

4-2 Sukiya may signify the Abode of Vacancy or the Abode of the Unsymmetrical.

It is an Abode of Fancy inasmuch as it is an ephemeral structure built to house a poetic impulse. It is an Abode of Vacancy inasmuch as it is devoid of ornamentation except for what may be placed in it to satisfy some aesthetic need of the moment. It is an Abode of the Unsymmetrical inasmuch as it is consecrated to the worship of the Imperfect, purposely leaving some thing unfinished for the play of the imagination to complete. The ideals of Teatism have since the sixteenth century influenced our architecture to such degree that the ordinary Japanese interior of the present day, on account of the extreme simplicity and chasteness of its scheme of decoration, appears to foreigners almost barren.

破擦音を含む /s/, /z/, /ʃ/ などによる音効果は上記の134語中51箇所に現われている。第4節では /k/ の音の繰り返しもあるが、「清浄」や「清潔」などのはっきりしたイメージを意図してのことであろう。第6節になると、feel, forest, far, from, flower など /f/ の音の多用により、俗界から「遠い」ところがイメージされてくる。

4-6 One may be in the midst of a city, and yet feel as if he were in the forest far away from the dust and din of civilisation.

そして第7節では、小堀遠州の句の冒頭に単数不定冠詞 a/ei/ を3度用い pale の /ei/ と押韻し、限りなく無に近い「寂静」「孤独」をイメージさせ、「彼岸」において悟りを求める心を音の響きと余韻とで表そうとしている意図が伺われる。そして tree と sea と evening の3語の長母音 /i:/ の押韻により「静まりかえった」風景の中に彼方の天空に憧れる強烈な想いとなって読者の心の耳に伝わってくる。

4-7 "A cluster of summer trees,

A bit of the sea,

A pale evening moon."

(夕月夜 海すこしある 木の間かな『茶話指月集』¹⁷⁾)

VI. 現実との遊離——神話、故事・伝説、宗教用語の使用

聖書、ギリシャ神話・ローマ神話・中国の神話、インドの神など、宗教的な語彙や古典的な作品からの語彙が多用されている。この背景には幼少時から東大時代を含め、長年に渡り積み重ねられてきた天心の幅広い読書や教養を示すものであり、東大時代の英文学の恩師、アメリカ人ホートン教授 (William A. Houghton, 1852-1917) の影響も少なからずあったであろう。

非日常的な語彙が示すものは、読者の想像力を促す作者としての工夫でもあったろう。現実と遊離した世界を描くことで神秘的で遠大な構想を伝えるであろう。こうした形而上的、非現実的な表現による想像力が、後年、ドナルド・キーンの批判的な内容の論文 (注21参照) の引き金となったのかもしれない。しかしGeorge Chapmanも言うように、¹⁸ 詩は真実を描くための手段ではなく真実らしいものを書く手段である。逆説的ではあるが、キーンが憤慨するほど非現実的な日本を描いているが故に *The Book of Tea* の詩的価値はそれだけ高いのだと言えよう。

1-4 Bacchus 「(ロ神) 酒神バックス」(ギ神ではディオニソス)

1-4 Mars 「(ロ神) 軍神マルス」

1-5 the thousand and one oddities 「(東洋の珍奇と稚拙を成す) 千と一つの風変わりなもの」(『千夜一夜物語』を暗示し、第6章で北条時頼を『アラビアン・ナイト』の主人公ハールーン・アッラシードに譬えるための布石としている。

1-6 lotus 「ハス (ギ神) ロータス (その実を食べると夢心地となり、家や友のことを忘れてしまうという植物)」

1-11 catechism 「(キ教) 教理問答、カトリック [公教] 要理」

1-16 Titan 「(ギ神) タイタン神、巨人、怪物」

1-16 Shuhyung (中国神) 「祝融 (闇と大地の魔神) the demon of darkness」

1-16 the divine Niuka (中国神) 「女媧 (頭に角のある竜尾をつけた女皇)」

1-16 the Yellow Emperor, the Sun of Heaven 「大日輪黄帝」

1-17 the Cyclopean struggle 「(ギ神) キュクロプスの闘争

(Cyclopsキュクロプスは一つ目の巨人、雷電を起こすとされる)」

1-17 Avatar 「(ヒンズー教のインド神) 神が化身してこの世に下ること。化身。」

2-8 O, nectar! 「ああ、神酒よ! → ああ、何という甘露!」

nectar 「神酒」はギリシャの神々の飲む酒のこと。ミルトンの『失樂園』でも散見される。

(*Paradise Lost*. Book IV. 240)

2-12 a holy sacrament 「(ローマカトリック、英国国教会、ギリシャ正教の) 秘跡 [洗礼、堅信、聖餐、聖体、赦罪、終油、叙階、婚姻の七聖礼典。] 聖餐式。

2-16 the utmost beatitude of the mundane (=supreme bliss)

「現世の無上の幸福 (山上でキリストが説いた「至福」—マタイ伝—5-3-11)」

3-7 Hide yourself under a bushel.... (聖) 「自分の才を隠匿せよ」出典はDon't hide your light under a bushel. 「山上の垂訓」。イエスが信者に信仰心を隠してはいけないことを述

べたものだが、それをパロディー化した表現。(マタイ伝Matt. 5:7)

- 4-3 “more than the Graces and less than the Muses” 「ミューズの女神達よりも少なく、
グレイスの女神達よりも多い」 ミューズはギリシャ神話の9人の詩の姉妹神であることから
9という数を、グレイスはギリシャ・ローマ神話の美の3人の女神であることから3という
数を示している。
- 5-6 communion (親交、霊的交わり、共有)
- 5-8 invoke (神の加護を祈る) 5-9 hallow (神聖にする)
- 5-15 rhapsody 「(古代ギリシャの) 叙事詩」, 「狂想曲」
- 6-2 bliss 「至福」 6-5 incarnation 「受肉」
- 6-5 victim 「犠牲」, commit a crime 「罪を犯す」, punishment 「罰」 (キリスト教の教理
に関わる語彙を用い花の前世の罪を述べている)
- 6-8 friar (カトリック) (托鉢修道会の) 「修道士」
- 6-12 “Flow, flow, flow, flow, the current of life is ever onward. Die, die, die, die,
death comes to all.” (仏教)

このくだりは弘法大師の「生れ之き生れ之いて六趣に輪転し、死に去り死に去って三途に
沈淪す」(大師・秘蔵宝鑰・第一異生抵羊心, p.17) という部分と、「生れ生れ生れ生れて生
の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し」(ibid. 序, p.6) を示唆し、天心も
同語句を4回繰り返している。もとより大師も四回という数に四=死という含意を込めたで
あろう。単なる言葉の彩や修辞学上の技術だけではなく、言葉の背後に隠された東洋思想の
奥深い背景を示唆しているため、*The Book of Tea*は文字通り『東洋文化の聖典』として
の価値を持つのであろう。従って思想面からも陸羽の『茶経』を越えるものであり、単なる
『茶経』の日本版ではないことを裏付けるものである。

- 6-12 phoenix (エジプト神話) フェニックス、不死鳥
- 6-13 atone 「償いをする」, consecrate 「～を捧げる」
- 7-7 Hades (ギリシャ神話) 死者の霊が住む地下界、死者の国

これらの語彙から、*The Book of Tea*にはギリシャ、ローマ、インド、イラン、アラビア、中
国、日本、イスラエル、エジプトなど多くの国々の神話や宗教に関わる概念を包摂していることが
認められる。特定の国の宗教でなく、多くの国の異なる宗教や神話に言及することで、多民族、多
文化を尊重するポスト・モダニズム的思想の萌芽が伺われる。こうした脱近代的思想の傾向も*The
Book of Tea*が現代において衰えることのない人気と読者を獲得している所以でもあろう。

VII. 比喩表現

*The Book of Tea*は全体が比喩の宝庫であると言える。I. A. Richardsは*Practical Criticism*
(1964)の中で「詩人はその天賦の才の一つとして独特の比喩を駆使する」¹⁹と述べているが、天
心の比喩の用い方にはI. A. Richardsの言う「天賦の才」と呼ぶにふさわしい巧みさがある。だ

が*The Book of Tea*には語句のレベルだけでなく文章やパラグラフ全体が比喩的に語られている場合もあるため明確なカテゴリー化が難しく、判然としないものもある。思想に関する比喩については稿を改めるべきテーマなので、ここでは若干の例を挙げるに留めたい。語彙における比喩については文化の概念構造を反映するという事実と²⁰、*The Book of Tea*の内容が東洋の文化を中心としている性質上、英語文化圏の人の文章に比べると言語の中に滲出している西洋的価値観や概念を示す比喩はさほど多くは見られず、東洋的なたとえが多く見られる。その理由としておそらく天心の言語の背景にある概念と世界観が、文中における使用語彙を選択する一大要素となっているためであると考えられる。

VII-A. 語彙・語句における比喩、擬人化

1-4 a tempest in a tea-cup 「ささいな揉め事」(隠喩)

1-6 the curious web of facts and fancies 「事実と空想が織りまぜられた奇妙な話し」(隠喩)

1-15 シェイクスピアやサッカレーWilliam Makepeace Thackeray (1811-63) を、genuine humouristとしてtea-philosophers「茶の哲学者」に譬えている。シェイクスピアの時代には、まだ茶がイギリスに輸入されていなかったので明らかな比喩である。天心の言うgenuine humourist とは「軽妙洒脱な機知に富み人生の機微の悟りを開いた人」という意味であろう。(隠喩)

1-16 Spirit and Matter met in a mortal combat. 「霊と物とが死闘を行った」(隠喩)

1-17 The East and West, like two dragons... 「東と西は、二頭の竜のように…」(直喩)

3-3 Translation is always a treason, and as a Ming author observes, can at its best be only the reverse side of a brocade, — all the threads are there, but not the subtlety of colour or design.

明の作家を引用し「翻訳は常に反逆である」と述べ、原文の微妙なニュアンスを伝えきれない限界を説いている。これは*The Book of Tea*の英文に込められた天心の意図を暗示的に表現した部分でもであろう。(隠喩)

5-5 The masterpiece is a symphony played upon our finest feelings. 「傑作は最も繊細な感情に訴える交響楽である」(隠喩)

5-5 Our mind is the canvas.... 「我々の心は画布である」(隠喩)

5-5 their pigments are our emotions 「画家の絵の具は我々の感情である」(隠喩)

5-5 their chiaroscuro the light of joy, the shadow of sadness 「その明暗法は喜びの光と悲しみの陰である」印象画の技法を暗示している。(隠喩)

VII-B. 固有名詞の比喩

5-7 Chikamatsu (近松門左衛門) → our Japanese Shakespeare

6-8 Hojo-Tokiyori (北条時頼) → the Haroun-Al-Raschid of our tales

6-9 Yoshitune (義経) → the hero of our Arthurian legends

日本人名を西洋の人にたとえることで西洋人にもわかりやすい人物像を描き出している。近松門左衛門を日本のシェイクスピアにたとえるなどキーンに批判されるような²¹ 極端な対比はあるが、これも天心の性格を反映し、相手の意表をつく大胆な発想に由来するかもしれない。

VII-C. 普通名詞における比喻

6-18 They (=flower-masters カッコ内筆者) also dwell much on the importance of treating a flower in its three different aspects, the Formal, the Semi-Formal, and the Informal. The first might be said to represent flowers in the stately costume of the ballroom, the second in the elegance of afternoon dress, the third in the charming dishabille of the boudoir.

活け花の3つの相（真、行、草）を説明するのに、女性の服装を引き合いに出し、それぞれ正装、準正装、略装に譬えている。（直喩）単調で無味乾燥になりがちな活け花の構成に関する理論的説明を身近なものに結びつけ、読者や聴き手の心を魅了する天心の話術の才が滲み出ている。

VIII. 簡潔で暗示に富む表現—シェイクスピアの影響

I で指摘したように、シェイクスピアの作品の題名からの引用が随所に散見される。（例：tempest in a tea-cupはShakespeare最後の作品である和解劇*The Tempest*『あらし』を、much ado about nothingは喜劇*Much Ado About Nothing*『空騒ぎ』を、またthe Taming of the Harpは*The Taming of The Shrew*『じゃじゃ馬馴らし』を連想させる。）だが影響と言うより敢えて天心は意図的にシェイクスピアを取り込んだという方が適切かもしれない。模倣は芸術にとって致命的である²²と考えていた天心にとって、その引用は単なる模倣や知識の受け売りなどではなく、西洋の巨匠の作品を咀嚼した上で一旦その域を離れ、東洋の気韻生動を取り入れて暗示的に独自の思想を語ろうとした証しだと解釈してよいかもしれない。こうした東洋と西洋との融和的手法の背景には、精神的な要素によって写実外に気高い情緒を表現するという「写実に徹して写実を超える」ことを目指した天心の新古典主義的な絵画的手法があると言えよう。

シェイクスピア：

...brevity is the soul of wit,.... (Hamlet, II. ii. 90)

The rest is silence. (Hamlet, V. ii. 369)

Ripeness is all. (King Lear, V. ii. 11)

天心：

Teaism was Taoism in disguise. (2-16)

Translation is always a treason,.... (3-3)

Its Absolute is the Relative. (3-4)

Definition is always limitation.... (3-7)

IN religion the Future is behind us. (7-1)

In art the Present is the eternal. (7-1)

無駄のない簡潔で力強い言葉はその奥に豊かな表現を内包するため余韻を感じさせ、解釈は無限に広がる。こうした暗示に富む断定的な表現が、時として誤解を生む原因ともなったことは、後に“Asia is one.”という『東洋の理想』の冒頭が誇張、歪曲され、誤用されてきた事実が示すところである。だが*The Book of Tea*においてはむしろ想像力をかき立て、事物の本質に迫るために無限の解釈の可能性を許す「詩想」を表出しているという観点から、従来の偏見や固定観念を排し、正当な評価がなされるべきであろう。

結 び

*The Book of Tea*の語彙を抽出し考察した結果、造語、詩語、詩的表現、リズム、音象徴、比喩、現実との遊離などの観点から天心が散文を韻文化するために詩的技法を用いたことが明らかとなった。押韻や比喩、音象徴、情景描写の手法、修辞疑問など、天心は東西両文化圏に共通する詩的技法を駆使することにより、19世紀から20世紀の初頭に欧米で偏見をもって見られていた東洋の芸術・文化を異国趣味的で奇異なものに終わらせることなく、文学的価値を持った普遍的なものへと高めることに成功したといえる。

*The Book of Tea*における文体の特異性は日本の茶の文化を基軸とした歴史的事実や伝説を写實的に語りながら、そこに修辞技巧を施し比喩的に芸術論を重ね合わせることによって普遍を論じるといふ韻文化された散文形態にあると結論できる。特徴としてその散文には古語や形式語を多用し洗練文語体によって詩的意匠をこらした文学的な脚色となされていた。そこには、読者の注意を惹きつける詩的機能を働かせるため形式に異化を行い、数ある言葉の中から意味や音の響きやそれが喚起するイメージによって文脈に最も適する語を選択し、組み合わせ、結合させることによって、陳腐な言葉に新たな意味を生じさせ、生き生きとした表現の世界を作り出すという詩人の特性が表れている。

すなわち*The Book of Tea*の英語から見えてきたものは明らかに「ことばの再創造者」たる詩人としての資質であり、英米文学の模倣の域を超え英詩と漢詩という異種言語が持つ特質と芸術性をいささかも減じることなく調和させ融合させた言葉の芸術家としての国際的文学者の姿であった。

こうした詩人としての天心の鋭い現実認識と言葉に対する真摯な態度とが100年間に渡って世界各国で読み継がれている*The Book of Tea*の人気を裏づける証の一つなのかもしれない。

1 池上嘉彦、『意味論・文体論』英語学コース4（東京：大修館書店，1991年），pp. 159-60.

2 Roman Jakobson, “Linguistics and Poetics” Sebeok, T. A., ed., *Style in Language* (Cambridge, Mass: MIT Press, 1960).

3 池上, op. cit., pp. 159-60.

4 本稿に用いたテキストはフォックス・ダフィールド社の初版本による。Kakuzo Okakura, *The Book of Tea* (New York: Fox Duffield & Company, 1906).

- 5 *TIME Europe*, June 17, 2002, vol.159, No.24. に、‘Tempest in a Tea Cup’ と題して The English tea trade flooded China with opium. 及び、*The New England Journal of Medicine*, Feb. 7, 1980, Vol. 302, No. 6, Massachusetts Medical Society. に、Tempest in a tea cup: the lemon-tea controversy. 等、英米のジャーナリズムに散見される。
- 6 「円相」は禅では文字ならぬ文字（不立文字）として「○」という形象で表わされるが、*The Book of Tea* の中では輪廻転生する「生」の象徴、宇宙の相として、天心の意匠で文字化され、暗示的に表現されているのが認められる。
- 7 John Milton, *Paradise Lost*, I-755 (New York: Longman Inc., 1986), p. 87.
- 8 teaism, addiction to tea. 1904. G. S. Hall. *Adolescence*. ix. II. 14. Excessive teaism, coffeeism, etc.,... to the prejudice of appetite for plain, wholesome nutritives, ... jeopard the highest maturation of powers. (O. E. D.)
- 9 堀岡弥寿子、『岡倉天心との出会い』（東京：近代文芸社、2000年）、pp. 98-9.
- 10 倉田文作も天心の語彙の豊富さを指摘している。『岡倉天心全集』巻2（東京：平凡社、1981年）p. 490.
- 11 G. L. ブルック、三輪伸春他訳『シェイクスピアの英語』（東京、松柏社、2000）、pp. 27-28.
- 12 池田久代、「岡倉天心と英文学」『鵬』（東京：岡倉天心研究会、2004）、p. 35.
なおfricasseeを含むスウィフトの*Modest Proposal*の原文は次の通り。
“A Modest Proposal for Preventing the Children of Ireland
from being a Burden to their Parents or Country” (1729)
I have been assured by a very knowing American of my acquaintance in London, that
a young healthy child well nursed is at a year old a most delicious, nourishing, and
wholesome food, whether stewed, roasted, baked, or boiled, and I make no doubt that it
will equally serve in a fricassee, or ragout.
- 13 石井白村、『英詩韻律法概説』（東京：篠崎書林、1989）、p. 19.
- 14 James Joyce, *Ulysses* (New York: Vintage International, 1990), p. 37で語られる “Won’t you come to Sandymount, Madeline the mare?” という表現は*The Book of Tea*のこの部分をもじった表現である。この後「リズムが始まるぞ」「ギャロップ調だ」という記述が雄弁にそれを暗示している。
- 15 池田拓朗、『英語文体論』（東京：研究社出版株式会社、1992）、p. 21.
- 16 石井, op. cit. p. 152.
- 17 谷端昭夫、『茶話指月集を読む』上（京都：淡交社、2002）、p. 73.
- 18 For the authentical truth of either person or action, who will expect it in a poem, whose subject is not truth, but things like truth?
George Chapman: ‘To the Right Virtuous and Truly Noble Knight, Sir Thomas Howard’
(Preface to *The Revenge of Bussy D’Ambois*, 1613).
- 19 I. A. Richards, *Practical Criticism*, 1st 1929. (London: Routledge & Kegan Paul Ltd. 1964), p. 223.
- 20 George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphors We Live By* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1980).
- 21 ドナルド・キーンは「日本文化の理解を妨げるもの」『中央公論』（東京、中央公論社、1955年）五月号の中で、『茶の本』を二度目に読んだ時の感想を、批判的に述べている。15年前に読んだ時よりも、より多くの日本の知識を持つに至ったキーンにとって、近松をシェイクスピアにたとえるのは「不適當」と考えられ厳しい批判をしている。しかし、天心はあくまでも、日本を野蛮な国とみなしていた当時の欧米の人々に、わかりやすい具体的人物の「たとえ」として紹介したのであって、厳密な文学的比較の意図はなかったであろう。
- 21 Okakura Kakuzo, “The Ideals of The East,” Sunao Nakamura ed., *Okakura Kakuzo Collected English Writings 1* (Tokyo; Heibonsha Ltd., Publishers, 1984), p. 124.

参 考 文 献

The Primary Source:

Okakura, Kakuzo. *The Book of Tea*. New York: Fox Duffield & Company, 1906.

The Secondary Sources:

- Jakobson, R. "Linguistics and Poetics." Sebeok, T. A. ed. *Style in Language*. Cambridge, Mass. : MIT Press, 1960.
- Jakobson, R., and L. R. Waugh. *The Sound Shape of Language*, 3rd ed. Berlin • New York: Mouton de Gruyter, 2002.
- Joyce, James. *Ulysses*. New York: Vintage International, 1990.
- La Farge, John. *An Artist's Letters from Japan*. Bristol, Tokyo: Ganesha Publishing, 1999.
- Lakoff, G., and M. Johnson. *Metaphors We Live by*. Chicago, London: The University of Chicago Press, 1980.
- Leech, G. N. & M. H. Short. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. English Language Series 13. London: Longman, 1994.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. New York: Longman Inc, 1986.
- Okakura, Kakuzo. *Okakura Kakuzo Collected English Writings*. 3vols, Ed. Nakamura Sunao. Tokyo: Heibonsha Ltd. Publishers, 1984.
- Shakespeare, William. *The Complete Works of William Shakespeare*. Great Britain: Wordsworth Edition Ltd., 1999.
- . 『ザ・シェイクスピア』坪内逍遙訳、東京、第三書館、2002年。
- 石井白村『英詩韻律法概説』東京、篠崎書林、1989。
- 池上嘉彦編『意味論・文体論』英語学コース4、東京、大修館書店、1991。
- 池田拓朗『英語文体論』東京、研究社出版株式会社、1992。
- 池田久代「岡倉天心と英文学」岡倉登志編『鵬』、東京、岡倉天心研究会、2004。
- 岡倉天心『岡倉天心全集』全9巻、東京、平凡社、1981。
- カールグレン・B『支那言語学概論』世界言語学名著選集 第Ⅱ期 東アジア言語編、第3巻 岩村忍・魚返善雄訳、東京文求堂、1937年。
- 窪園晴夫、溝越彰『英語の発音と英詩の韻律』英語学入門講座 第7巻、荒木一雄監、東京、英潮社、1996。
- 国廣哲彌編『発想と表現』日英比較講座、第5巻、東京、大修館、1989。
- 弘法大師「秘蔵宝鑰 第一異生羝羊心」『弘法大師空海全集』第二巻、宮坂有勝訳注、東京、筑摩書房、1983。
- 齊藤勇『英詩概論』東京、研究社、1992。
- ジェイムズ・ジョイス『ユリシイズ』5巻、丸谷オ一、氷川玲二、高松雄一訳、東京、集英社、2003。
- G. L. ブルック『シェイクスピアの英語』三輪伸春、佐藤哲二、濱崎孔一廊他訳、東京、松柏堂、2000。
- ドナルド・キーン「日本文化の理解を妨げるもの」『中央公論』5月号、東京、中央公論社、1955。